

総力戦体制下の雑誌『保育』における「母親教育」記事 ——1940年代前半の「母のページ」枠を中心に——

浅野 俊和*

Education for Mothers in the Monthly Magazine “Hoiku” in the Early 1940s: A Series of Articles Titled ‘Haha-no Page’

ASANO Toshikazu

要 約

本稿は、雑誌『保育』（「全日本保育聯盟」編輯・発行）で、1940年代前半期に特設されていた「母のページ」枠を取りあげ、その母親教育の内容的な変化を検討するものである。同枠の特徴は、次の3点にまとめることができる。第1に、保育・教育・社会事業といった斯界のみならず、政界や企業、軍部など、多様なつながりを積極的に利用して、時局が要請する母親教育の内容を形づくっていた点である。第2は、催事との連動、広告との一体化など、いわゆる「メディア・イベント」としての性格を持った誌面づくりがなされていた点である。第3は、西村眞琴らによる「親子理科」関係の読み物を掲載する一方、「全日本保育聯盟」母性保護の会主催で「母子郊外趣味の会」を開き、その実施報告も「母のページ」枠で連載するなど、母親の科学的教養の向上をめざした点である。

キーワード：『保育』、全日本保育聯盟、西村眞琴

はじめに

「皇紀二千六百年」に当たる1940（昭和15）年、文部省社会教育局は、「今や、聖業の完遂前途尚容易ならざるの秋、国民の実践すべき各般の事項の徹底は究極に於て家庭に求むるの外なく、家庭は強力日本建設の推進力にして又次代国家を担ふべき子女の養成の根柢は家庭に俟つこと極めて大なる」として、「『母の会』『母姉会』『婦人会』等の婦人団体の機能を活用して益々家庭教育の振興に努め」ることで、総力戦体制下における家庭教育実践網の確立を進めた¹⁾。文部省社会教育官として家庭教育振興に携わっていた倉橋惣三も、同年早々に、「幼稚園の任務が、園内幼児生活の保育に止まるものでなく、

その幼児達の家庭教育補導に意を用ゐなければならぬことは、予て屢々説き来つたことであ」り、「しかも、その必要は愈々大なるものがあり、一層力を入れて主張せざるを得ないことを感ずる」と述べ、保育施設による「母親教育」の意義を強調している²⁾。

倉橋が主幹を務める「日本幼稚園協会」の編輯・発行誌『幼児の教育』では、社会的要請に応え、1940年1月号（第40巻第1号）より月刊「幼児の母」欄を新設し、「母親教育」の組織化に乗り出した³⁾。彼によれば、『『幼児の母』の第一の主旨は、現に幼稚園にある幼児の家庭教育に貢献したいのでありますが、或は之れを以て、幼稚園外の家庭に広く働きかけて、幼児期教育の主要性を宣布し、ひいては、幼稚園の正しき意味での宣伝にも用ゐられ得ると考へます」し、「本会としては、更に、一園でも多くに御すゝめして、之れによつて、我国の全家庭に、

* 中部大学現代教育学部幼児教育学科

幼児教育の促進と刷新とを図りたいと、熱望し切願して居る次第であります」とされる⁴⁾。同欄は、1943（昭和18）年10月号（第43巻第10号）までの毎号に欠かさず掲載され、抜き刷りも別途発行されて、母の会などで利用された。

一方、『幼児の教育』と並ぶ保育雑誌の1つに数えられる『保育』（「全日本保育聯盟」編輯・発行）も、第42号（1940年10月号）で「母のページ」という括りを目次上に設け、母親向けの内容を強調しはじめている。同誌は、1937（昭和12）年4月の創刊当初から数号にわたって「家庭保育 ちごちご草」欄を設け、表紙でも「お母さんと先生の雑誌」と掲げてきており、母親対象の特設ページを置くのは2度目のこととなる⁵⁾。「母のページ」枠を設ける誌面構成は、何回か例外が見られるものの、第71号（1943年3月号）まで2年半にわたり続けられ、まるで『幼児の教育』誌の月刊「幼児の母」欄と競いあうかのように、『保育』誌は「育児報国」へと邁進していった⁶⁾。

雑誌『保育』の内容は、創刊の「当初から、国策協力の姿勢が明確で、戦時体制の進行につれて誌面全般に戦時色が濃くなってい」っており、「同じ時期の『幼児の教育』も同様であるが、本誌の場合はそれがより強烈であり、戦時中の保育というものの特徴をより明確に教えてくれる」とされる⁷⁾。同誌で新たに設けられた「母のページ」枠は、総力戦体制が強化されるにしたがって、どのように内容的な変化を見せたのか。また、同枠は、かつての「家庭保育 ちごちご草」欄や『幼児の教育』誌の月刊「幼児の母」欄と、どういった違いを持っていたのか。本稿では、そのような観点から、1940年代前半の『保育』誌における「母親教育」記事へと迫ってみたい。

I. 母親向け特設ページの再開

雑誌『保育』は、同誌の創刊号と同時期に発刊された別冊子「家庭保育 ちごちご草」を合冊する形で、第4号（1937年7月号）から第8号（同年11月号）まで同名の母親向け特設ページを置いていた。その後は、「お母さま方のよみものも保姆先生方のよみものも混然融合各々糧となる」との方針に基づいた誌面構成へ切り替わり、それが3年ほど継続することとなる⁸⁾。「母のページ」という括りを目次上に

設け、再び母親教育に力を入れはじめたのは、前述したように、第42号（1940年10月号）からのことであった。

そうした方針転換の意図は、いったい何であったのか。その点については、第42号巻末の「編輯室」で次のように言及されているのみで、誌面から詳しいことはわからない。

「……〔本号では〕母の^{（ママ）}ページを設け、石川謙先生の『母を語る』〔、〕西村本聯盟理事長指導の『母子郊外趣味の会』ほか従来より一層その充実に努めました。併せて熟読玩味あらんことを。」⁹⁾

「従来より一層その充実に努め」た誌面づくりのために、第42号から「母の^{（ママ）}ページを設け」たのだという。ただし、そのような転換に先立って、全日本保育聯盟は、1940年5月末から6月末まで機関誌創刊3年記念事業を大々的に行っており、「保育報国の実を挙げる」ため、「国防婦人会並に大阪乳幼児保護協会共催の下に『時局下に於ける保育総動員展覧会』〔於・宝塚〕を開き保育の諸相を展示して一目のもとに瞭然たらしめ、又一面には国体明徴の上から、将た又育児愛護の情味豊かなる史実を探り……『保育の鼻祖虫広姫』なる〔宝塚少女〕歌劇を創つて普く公開」し、「国防婦人会が幼児保育の重要性を国家興隆の源泉なりと叫ばれたるに呼応提携して、共に我が国次代の良民養成の堅陣を張り保育の分野に対し、広く深く耕作の鋤をいれることを誓ひ以て記念の意を表明」していた¹⁰⁾。そして、同年7月には、次のように大日本国防婦人会との協調を「巻頭言」で宣言しており、そうした企図が10月号以降の誌面づくりにも影響を与えたと考えられる¹¹⁾。

——（巻頭言）——

国防婦人会は蓋し我国現下の婦人の団体組織としては一番多数を占めてゐるだらう。その上これを組織する会員層はこれ亦一番広い巾を持つてゐることであらう。或る意味からは日本婦人の生活層の断面を示してゐる、更に或る意味からは家庭^{（ママ）}総動員への最も有力なる蝶番であると見られる。全国民を打つて一丸とする力の総和は女性に礎石

をおくことの妙味に想到する。これは時局非常の今日に於てこの団体のもてる使命を考察するに随て愈々大なるを痛感する次第であるが、今回本聯盟が国婦関西本部と共催して保育総動員展を開くに当り、子供と母性の重要な諸問題について会員各位より接受したる回答は実に夥しいものであつた。しかも実際に即し、切れば血の出るやうな生彩を以て満ち満ちてゐた。此の種の資料こそは子女の教育上のみならず現代文明批判の最も鋭き反映を示す対象である。内容は複雑で実に多面的である。この事柄を検討しても我々の期待は膨張する。国防婦人会の特性は今日及び将来にむかつて駭々乎として發揮されるであらう。殊に「国防」といふ名義の広意的解釈の中に、保育の分野は自ら包含される。随つて会員各位の所見並に持てる物を発表したことは蓋し時代の要求する適切な企図でなくてはならない。

かつて機関誌『保育』の創刊時には、内閣総理大臣兼文部大臣の林銑十郎と内務大臣の河原田稼吉の祝辞を掲載し¹²⁾、「文部、内務両大臣より『保育』の第一歩を祝福した祝辞を賜りましたことも『保育』創刊号の意義を深からしめます」として、「全日本保育聯盟」は両省との結びつきを強調していた¹³⁾。ここへ来て、陸軍省・海軍省の指導監督下にあった大日本国防婦人会との協調路線を取ったという点は、それら両省（軍部）とのパイプも新たに持ったことを意味していよう¹⁴⁾。

なお、1940年8月発行の第40号を以て『保育』編集人・発行人（編輯長）の大井正一が退任し、翌9月の第41号から長野隆義（大阪市立高臺幼稚園園長、のち高臺小学校校長）へと代わっていた¹⁵⁾。それ以降、「母のページ」が目次から姿を消した数ヵ月に発行される第73号（1943年5月号）まで、長野は編輯・発行に携わり続けることとなる。そうした担当者の交代も、誌面構成の方針転換に少なからず影響を及ぼしたものととらえられよう。

「母のページ」は、目次上に示された括りであって、かつての「家庭保育 ちごちご草」欄のように雑誌内でまとまった特定の部分を占めるものとはなっていない。しかし、目次で分けられた論稿や記事は随所に掲載されているけれど、該当するものの標題

ないし筆者名近くには必ず小さな文字で「(母のページ)」という添え書きがなされており、冒頭を見れば母親向けであることがわかるようになっている。

また、雑誌のあちこちに点在する「母のページ」では、その欄にまるで付随するかのような形を取って、各種の企業広告も掲載されていた。広告主は医薬品や栄養剤、食品、文具、レコードなどの育児用品メーカーに加え、百貨店や鉄道会社、金融機関も入っている。その多くは一般的な形式のものが大半を占めているけれど、中には商品を使用した母親の感想文や専門家の講話・解説文などが長々と載せられているものもあり、本来の論稿や記事と見間違ふようなレイアウトがなされている場合も見られる。さらに、後述する「母子郊外趣味の会」と私鉄の広告がまるで連動をしているかのような場合もあった。こうした形で企業とタイアップしたかのように見せる「母のページ」の誌面づくりは、展覧会などといったイベントの開催を含め、大阪毎日新聞社というマスコミを母体に持つ「全日本保育聯盟」が取った戦略の1つであり、宣伝媒体としての性格を強く意識したものでもあろう。

Ⅱ. 「母のページ」枠の内容的な変遷

(1) 第42号（1940年10月号）から第53号（1941年9月号）まで

第42号（1940年10月号）から第71号（1943年3月号）まで2年半にわたって設けられていた「母のページ」枠は、何度か内容の変化を見せている。それは、1) 第42号（1940年10月号）から第53号（1941年9月号）まで、2) 第54号（1941年10月号）から第59号（1942年3月号）まで、3) 第60号（1942年4月号）から第71号（1943年3月号）までの3期にほぼ分かれる。

まず、第42号（1940年10月号）から第53号（1941年9月号）までの時期を見てみよう。この期の特徴は、一言でまとめれば、多様な内容の論稿・記事を数多く並べ、母親の基礎的な教養づくりをめざしている点にある。例えば、目次上で「母のページ」がはじめて登場した第42号での中身については、次のようなものであった。

***** (母のページ) *****

母を語る	石川 謙
幼児のお惣菜とおやつ	桑名 幸江
大陸子供の生活―陣中人メモより―	今村まさる
母の随筆 母のねがひ	秋山 禮子
環境	潮崎 邦子
(保姆から母への注文) 感謝の心	大道 てる
母子郊外趣味の会〔第一回〕	
〔本聯盟母性保護の会〕	

この時期における基本的な構成は、上掲のように、教育学者・心理学者・医師・作家ら有識者による論稿をメインとし、保健・栄養関連の読み物と作家・保姆らや母親自身による随筆をいくつか並べ、西村眞琴あるいは全日本保育聯盟による「親子理科」関係の連載を置くという形である。そして、それらに短歌・俳句・童話などの文芸が時折加わるということもあった。

メインとなる論稿の執筆者は、上記の石川謙をはじめとして、大伴茂や青木誠四郎、吉岡彌生、奥むめお、細田源吉、山室善子、入鹿山勝郎らが務めており、その専門分野もかなり多方面にわたっている。また、それらの論稿については、各号の特輯や巻頭論文などではすでに「国防」や「国体」といった文字が見られはじめている一方で、そうしたものとテーマ的には連動しておらず、「母のページ」としての独自性を発揮するような内容になっていた。

続く保健・栄養関連の読み物は、季節ごとの注意すべき傷病や旬の素材を生かした料理などが紹介されており、短めで内容的に簡潔なものが多い。また、作家・保姆らや母親自身による随筆も身辺雑記が大半を占め、まだ時局色は薄い。

さらに、西村や聯盟による「親子理科」関係としては、「全日本保育聯盟」母性保護の会主催「母子郊外趣味の会」の実施報告という読み物が連載されている（かつて「家庭保育 ちごちご草」の一部として位置づけ、その枠が取り払われて以降も載せてきた「親子理科」（西村眞琴執筆）を当初は併載していた）。いったい、「母子郊外趣味の会」とは、いったい何なのか。それは、聯盟の大黒柱である西村眞

琴と長野隆義による指導の下、家庭に閉じこもりがちとなる母子を郊外に連れ出し、自然との触れあいを通して心身の健全化を図ろうという取り組みであった。その趣意については、連載第1回の冒頭で、次のように述べられている¹⁶⁾。

いつの時代でも願はしい事だが、わけても現代は母性の保護が国家的に重要視される問題となつた。即ち次代を立派にするがためだ、^(ママ)その立派とは健全な第二の国民をそだてあげる事だ。こんな重大な責任を母性だけに呼びかけただけでは何にもならないと思はれるが、之は固より父性の責任を忘れたのではなく、大に父性の理解をまたねばならない、^(ママ)健康な子供を産み、充分乳を与へて、よく保育するためには、まづ第一に母体が健全でなくてはならない、^(ママ)その母体を保護するといふことは父性の義務であるが、新体制の建て前から云へば、国民全体が考慮を為すべき問題である。

この位の事は誰でもわかりきつてゐるが、その方法を講ずる事が実際問題であるのだ。

「母子郊外趣味の会」の目指すところは此の母性保護運動の方法の一つとして創意したのであつて、専ら次の諸点を満すことによつて、自ら母性保護と郊外保育の目的の両全を期するのである。

一、新鮮なる空気を呼吸し、日光の持つ健康増進力を充分に利用する事。

二、精神の衛生に重きをおいて、平素わだかまつてゐる心の塵を払いのけるやう朗らかにして健全なる指導に力を尽す事。

三、山川森野に交はり、動植物を対象に生命の諸相を学んだり、大地と天の大現象についての法則を考へたりする、^(ママ)但し頭からむづかしい理論にかぶりつくのではない、^(ママ)花鳥虫魚についての趣味をたどりいつとなく触れ学ぶのだ。

四、子供も母も写生する、^(ママ)之によつて観察を細かにし、表現法を会得する。

五、子供は物を観察して母にたづねる、^(ママ)母が答へられない時にこちらがお手伝ひする。だから母は此の仕事の最も適当な、行き届いた助手であり又子供と共に自然界の教場に学ぶ生徒である。此の際に心得べき点は、子供は子供の世界をつくり大人は大人の世界が出来る、^(ママ)自然のふ

ところは、子供をも大人をもはぐくみ抱いてくれる。尤も子供の世界と母の世界とは一致してゐる場合が多い。

六、まとまりをつけるために目の前に見てゐる事柄を種にお話をする。

七、朝の九時から始め成るべく午前中で段落をつけ午後は母子が自由に遊んで帰へる。

八、母が後日子供を導かれるやうに、その日に修得したところを印刷してお渡しする。

九、此の会は年に二回展覧会を開き平素学んだところを発表する外、家庭の参考となるやうな資料を展示し、又講演会をも開いて一般にも聴いてもらふ。

十、要するに

大自然を教場として母子の心身を健やかにし観察の仕方を学び、又それが表現を試み、一致して事をなす集団の訓練をなし、他人を思ひやる同情心を養ひ利己心を矯め、良き趣味を養つて性情を陶冶し以て皇国民たる上に大切な躰を為す会合で、毎月一回日曜を利用して開催する。

この会は第1回が1940年9月に箕面市で実施され、1942年末まで全23回行われており、それらの実施報告が「母のページ」に連載されていく。内容については、上掲した趣意に基づき、自然体験の意義や動植物の具体的観察方法、家庭での理科実験、科学玩具づくりなど、「親子理科」の実践法を講述するものとなっていた。

なお、第53号（1941年9月号）は、目次上で「母のページ」を設けておらず、これまでのような論稿や記事も掲載はされていない。同号では「郊外保育」をめぐる特輯が大々的に組まれており、紙幅の都合からあえて載せなかったものと考えられる。

(2) 第54号（1941年10月号）から第59号（1942年3月号）まで

次に、第54号（1941年10月号）から第59号（1942年3月号）までの時期である。この期の特徴は、一言でまとめれば、これまで見られた論稿・記事の構成や内容が少しずつ変化を見せはじめていったところとなろう。

「母のページ」の休載明けとなる第54号（1941年

10月号）では、括られた論稿などの本数が減り、保健記事は残しているものの、「日本の母性」や「躰方と家風」といったテーマを強調するようになった。同号の枠内は、次のようなものである。

*****（母のページ）*****

歴史より見たる日本の母性	野田 義夫
子供の躰方と家風	泉 道雄
神経質的な育児の仕方	野上 俊夫
愛児の眼鏡の装用に就て	西川 明孝

この号の巻頭論文は、前号の「郊外保育」関連から大きく展開し、「皇国」日本の子どもを強調するものとなっている。次号以降も、「防空」や「錬成」、「人口」、「科学する心」などの時局的なテーマを扱い、戦時体制への協力を強調していく。こうした誌面づくりの方針転換が、「母のページ」にも徹底されたのであろう。

しかし、休載を挟みつつも、「全日本保育聯盟」母性保護の会主催による「母子郊外趣味の会」の実施報告は連載が続けられており、前述したような立場は崩していない。これは、当時進められていた科学教育振興政策に応える取り組みとして、「聯盟」が自負を持っていたからであろう。

そのような編輯が続けられる中、1941年12月8日に日本はアジア・太平洋戦争へと突入する。『保育』誌は、次のような編輯後記をすぐさま掲げた¹⁷⁾。

十二月八日、日本にあがつた叫びは文字通り前代未聞の決心の爆発であつた。隠忍と忍苦の深ければ深いほどその叫びは悲壮で、その意図は雄渾なものであつたのだ。出来得る限り平静をもつて平和を称へたるその心境こそ沈勇の所産でなくてなんであらう。我等は世界の正義の保全を慮るが故に我を没して常に八紘一字の大精神の本流を滔々と流しつゞけて来た。

慈むが故に能く勇む、これが大和魂の姿なのだ。来るべきものは遂に来了。我等はこゝに国運伸張の新発点に立つて益々責任を感じつゝ、視まもることの光栄を担つてゐる。過去三千年の歴史の中に、この種の気構へを有し得たことは古の万葉歌人が御民吾れ生けるしるしあり天地の／榮ゆる時

に会へらく思へば
と言揚げたその感激をこの聖代において我等も亦
更に雄々しく言揚げんとするものだ。

今や二千六百一年を送る極月に於ける「保育」
誌の編輯を終り、いとも心地よくこの後記を記す
ことの出来たことは何たる光栄であらう。我等は
徒らに瀕々として至る捷報の前に酔ふものではな
い、否むしろ緊張を倍加して来たれ大敵！ 振り
かゝれ重圧！ その大難の前に一億一心の総力を
いやが上に燃焼せしめて堂々とこれを切抜けんと
す、その意気や正に天を衝く。

愛読者諸姉——幸にこの志を共にして来るべき
待望の歳を迎へられんことを。

——宣戦の大詔を拝して五日目記す

開戦は、誌面の内容にも大きな影響を与え、「母
のページ」の編輯方針は転換をしはじめる。第57
号（1942年1月号）では模範的な母親像として伊藤
博文公・山内達雄大尉・孟子・東郷平八郎元帥の母
を称えるコラムなどが掲載されたり、第58号（同
年2月号）においては「健気な母を訪ねて」のイン
タビュー特輯が組まれたりするなど、「母性」強調
が前面に押し出され、かつて誌面を彩っていたよう
な生活記事は次第に影を潜めていった¹⁸⁾。その企図
について、編輯後記では、次のように述べられている。

「母のページ欄には本誌記者の訪問記を掲げ
ました。貧苦と闘ひつゝ、如何に愛児を育てたか
——此処にも貴い、そうして深い母の愛情が必
ずや読者諸姉の胸を打つものと信じます。」¹⁹⁾

そして、第59号（同年3月号）においては、「母
子郊外趣味の会」実施報告の連載を再開する一方で、
家庭における「保育道」や「健兵健民」をテーマと
した小特輯を組んだ。その編輯意図に関しては、次
のように記されている。

「本号では地久節〔昭和天皇妃香淳皇后誕生
日〕を寿ぎ奉りて、特に母のページに力を注ぎ、
斯界の権威たる荻原擴先生、由良哲次先生、
……特に由良博士は独逸に於ける幼児教育の研
究者として著名。此の両博士の玉稿を掲載する

ほか、数篇を母のページとして、世のお母様方
への贈物と致しました。」²⁰⁾

同号では、西村眞琴による巻頭論文「発展日本の
女性の使命」を掲げ、誌面全体で「母性」動員へと
大きく舵を切りはじめていた。そのような転換は、
次号における「母のページ」でより一層具体化され
ることとなる。

(3) 第60号(1942年4月号)から第71号(1943 年3月号)まで

続いて、第60号（1942年4月号）から第71号（1943
年3月号）までの時期である。この期の特徴は、一
言でまとめれば、「重大時局」という要請に応え、「皇
国の重責」を負うに足る子女の育成及び母が担うべ
き使命の自覚へと、内容を一新させたことである。

そうした方針転換の背景には、何があったのか。
公式的な年月日は相前後するけれど、1942年5月7
日、文部次官通牒「戦時家庭教育指導ニ関スル件」
（発社128号）が各地方長官宛に出され、その別紙
という形で「戦時家庭教育指導要項」も発表されて
いる²¹⁾。同「要項」は、「我が国ニ於ケル家ノ特質
ノ闡明並ニ其ノ使命ノ自覚」と「健全ナル家風ノ樹
立」、「母ノ教養訓練」、「子女ノ薫陶養護」、「家生活
ノ刷新充実」という全5項からなり、各項の下に全
25項目が示されたものである²²⁾。特に第3項「母ノ
教養訓練」では、天皇制家族国家観における家の維
持という理念のもと、「家庭教育ハ固ヨリ父母共ニ
其ノ責ニ任ズベキモノナレドモ子女ノ薫陶養護ニ関
シテハ特ニ母ノ責務ノ重大ナルニ鑑ミ母ノ教養訓練
ニ力ヲ致シ健全ニシテ豊カナル母ノ感化ヲ子ニ及ボ
シ次代ノ皇国民ノ育成ニ遺憾ナカラシムルト共ニ健
全ニシテ明朗ナル家ヲ実現セシメン」ことが謳われ、
「国家観念ノ涵養」と「日本婦道ノ修練」、「母ノ自
覚」、「科学的教養ノ向上」、「健全ナル趣味ノ涵養」、
「強健ナル母体ノ錬成」の6項目があげられている。
それら項目の多くは、およそ1年前に示された教育
審議会答申「家庭教育ニ関スル要綱」（1941年6月）
の内容が『大東亜共栄圏』確立を目指した戦時体制
に直接結びつけられており、家庭教育及びその担
い手である母親を戦時体制へ動員することをねらい
とし「たものであったとされる²³⁾。

こうした「戦時家庭教育指導要項」の概要が、第60号（1942年4月号）の「母のページ」枠で、いち早く「新母性訓——文部省の指導要項」と題して掲載されている。それを枠内での巻頭言的位置づけとし、次のような構成で論稿などを並べたのである。

*****（母のページ）*****

新母性訓（文部省の指導要項）

国語の親としての母 石井 庄司
独乙の家庭に於ける幼児教育（下） 由良 哲次
母子郊外趣味の会（第十五回）

本聯盟母性保護の会

このように、以前からの連載を継続しつつも、枠で括った論稿を大幅に減らして、「戦時家庭教育指導要項」への同調を他誌に先んじて示した。また、同号自体が、巻頭に配した3つの論稿で「大東亜建設」の小特輯を組んでおり²⁴⁾、それらとともに「将来の大東亜指導者を培うお母様方、幼稚園諸先生方の御精読をお願い」する誌面づくりともなっている²⁵⁾。

そして、その路線は、第61号（1942年5月号）でさらに推し進められることとなる。同号の「母のページ」は、平出英夫「母よ強かれ」と特輯「新母性訓座談会」の2つで構成されており、前号に掲げた「新母性訓」の具体化が図られている。枠の巻頭言として掲載された平出の言葉は、次のようなものである²⁶⁾。

母よ強かれ

大本営海軍報道部課長 海軍大佐 平出 英夫

「母強ければ国強し」これは私の信条であり又真理でもありませう。立派な母があつてこそ立派な軍人が出来るのです。今、日本は国の興廃を賭けて戦つて居ります。戦争には是非勝たねばなりません。此戦争に敗れては恐らく日本は永久に立たないでせう。勝つためには軍人が強くなければならぬと同時に国民全体が強くなければなりません。国民を強くするのは母であります。どんなに戦争が続かうとも世のお母さま方が自分の家庭を守り次から次へと強い勇士を育て、下されば国は安

心です。

一方、座談会は、市川寛（大阪市教育部長）や望月クニ（神戸愛児園園長）ら8名を招き、聯盟の西村眞琴・長野隆義・河村猶次郎と意見が交わされたものである。その趣旨については、「過般、家庭教育振興に関する文部省の指導要項（所謂新母性訓）が新聞紙上に発表されましたのを機会に、教育者の立場からこの指導要項を検討し、どう云ふ方法で世の母親達に徹底させるか或はどう云ふ風に子女の教育の上に生かすべきか等の問題につき体験を通して忌憚なき御意見を伺ふため諸權威の御参集を願ひ、本聯盟主催により四月十一日大阪毎日社に於て座談会を開きました」と記されており、全16ページにわたって記録が掲載された²⁷⁾。

こうした「母のページ」の編輯意図は、どのようなものであったのだろうか。同号の編輯後記には、次のように述べられている。

『母よ強かれ！』とは平出〔英夫〕大佐の言、しかし此処に云ふ母はあなたがち母親のみを指すものではない、母即ち女性を云ふのだ。／大東亜建設生みの苦しみは、生れ出る新時代が輝かしければ輝かしい程、また大いなる繁栄を齎らすものなれば齎らす程大きく深いのだ。此の輝かしい新時代への激しい移行期に生きる日本の女性は、須く強くなくてはならない。従来^(ママ)の日本婦人にみる優しさのみでは、此の大いなる陣痛の時代に処せなくなつたのだ。優しさは日本女性の誇りだ、しかしその優しさに加ふるに今二つの要素、強い精神と強い体力が始めて完全な現代日本女性を創造する。／母よ！全女性よ！強かれ！ さうして強い意志と力で、一歩々々勝利の道を進むのだ。』²⁸⁾

このような「新母性訓」の趣旨に応える誌面づくりは、「母子郊外趣味の会」実施報告を断続的に掲載しながら、しばらく続けられることになる。個々の中身について、論稿では、前述した「戦時家庭教育指導要項」の第3項「母ノ教養訓練」にしたがえば、「健全ナル趣味ノ涵養」を除き、「国家觀念ノ涵養」と「日本婦道ノ修練」、「母ノ自覚」、「科学的教養ノ

向上」、「強健ナル母体ノ鍊成」の5項目が論稿のテーマとして扱われている。また、随筆や記事、コラムは姿を消し、啓発的な読み物において、同「要項」の第4項「子女ノ薫陶養護」に含まれている「良キ躰」や「身体ノ養護鍛鍊」などに関わる内容も取りあげていた。それらが「母のページ」における編集テーマとして重視されていたことは、第60号掲載の「新母性訓」で解説が加えられていた項目とほぼ一致している点からも窺い知れる²⁹⁾。

一方、体裁については、「母のページ」として目次で括られた論稿・読み物などの掲載数が減っており、2本から4本までの間を行き来している。それに伴い、枠全体に割かれたページ数も減少した。そして、第64号（1942年8月号）では、同枠で特輯「幼児の家庭建設」を組んだため、「(母のページ)」という添え書きが各論稿・記事の冒頭から消え、次号以降もそれが継続されていく。

そうした縮小を見せつつも、『保育』誌は「母のページ」枠を残し続ける。それは、「母の力が家庭の営みの裡にあり乍ら、今日では大東亜と云ふ諸民族を指導する最も根源的な力であると極言されますのも、今次大戦の『九軍神』を始めとしての護国の英霊と散華せられた神兵の生れ出づるのも、ひとしく幼児期に於ける母の力なくして生れ出づるものではないのです」という、編集部の方針によるものであった³⁰⁾。

しかし、その編集方針も用紙統制の国策にはしたくわがざるを得ず、第70号（1943年2月号）では、「本誌も国策に順応致します趣旨の下に減頁を断行致しましたが、これに依つて編輯子は内容の重点主義を計り、本誌の発刊以来の使命を益々發揮したい考へでありますから御声援をお願いします」と、転換を迫られることになる³¹⁾。「内容の重点主義」の目玉として打ち出されたのは、続く第71号（1943年3月号）から「園のページ」の掲載を開始することであり、そのような誌面づくりは、次のように、「母のページ」枠を圧迫するものともなってしまう。

「本号より待望の『保育案』を発表することになりました。原稿が予定数以上になりましたので、可成の紙面を割きました……。〔中略〕／本号は母のページが縮少(ママ)されましたが、次号から

は予定の均整を計つて進んで行き度いと存じます。」³²⁾

ところが、第72号（1943年4月号）では、「予定の均整を計つて進んで行」くどころか、目次から「母のページ」という括りをなくしてしまい、その方針が以降も続くことになる。とはいえ、同枠で連載されていた論稿の掲載はなされており、目次上から括りが消えたに過ぎなかった。その後、第73号（1943年5月号）では、前号で連載も終わったことから、母親向けの論稿・読み物が一時的に姿を消すものの、第74号（1943年6月号）以降では掲載を再開する。もう一度ははじめた理由については、同号の編輯後記において、次のように述べられている。

「……先月号は編輯の都合で家庭のお母様方にお送りする記事が少く(ママ)ありましたけれども今月号はそれを補ふ意味に於きまして先づ西村〔眞琴〕博士の麗筆は思想問題と母性の責任を明らかにしたもので重要なもので味ふ可く、そして三読に値する一文を飾ることが出来ました。／……大江〔文城〕先生、栗原〔登〕先生の玉稿は都合により遅れましたことを執筆の先生方にお詫び致します。共に味ひある母のための一文であります。」³³⁾

そして、「母のページ」という括りを目次からなくし、母親向けの論稿・読み物を減らした『保育』誌は、第75号（1943年7月号）で他誌『国民保育』との統合を予告し、翌第76号（1943年8月号）から同誌を合併吸収して、編集方針の転換を図る³⁴⁾。しかし、その1年半後の1945（昭和20）年2月、第94号を以て休刊してしまう。水野浩志によれば、「昭和二〇年初頭三月号を印刷している最中に印刷所が被災し、焼失してしまったため、『保育』は二月号をもって廃刊ということになったが、西村眞琴はその後自宅でもオフセット印刷機をつかってみずから少しばかりの部数ではあったが手刷りし、希望者に無料配布しつづけたのである」という³⁵⁾。とはいえ、翌1946（昭和21）年5月に同誌は版元を変えて昭和出版（現・ひかりのくに）から復刊され、1974（昭和49）年3月号（第29巻第3号）まで刊行されるこ

となる³⁶⁾。

おわりに

以上、本稿では、『保育』誌の第42号（1940年10月号）から第71号（1943年3月号）まで目次上で括られていた「母のページ」枠を取りあげ、その内容の変化をたどってみた。最後に、それらの歴史的意味について、かつての「家庭保育 ちごちご草」欄や『幼児の教育』誌の月刊「幼児の母」欄との違いを意識しながら、3点から検討することで全体のまとめを行いたい。

第1は、保育・教育・社会事業といった斯界のみならず、政界や企業、軍部など、多様なつながりを積極的に利用して、時局が要請する母親教育の内容を形づくっていた点についてである。それは、「全日本保育聯盟」の組織基盤が大阪毎日新聞社による社会事業であったことから来よう。

そのような立ち位置については、聯盟の生みの親である西村眞琴も強く意識していた。「全日本保育聯盟」結成から半年後の1936年12月、西村は、次のように述べている。

「新聞社の社会事業は、新聞社なるが故にはじめて企て得るものでなければならない。世間の嘱望と、新聞社の責任観（一面からは自負）がこの工作に努力をもたらすのである。／新聞が時代の先端を行くものとせば、新聞社の企てる社会事業にもこの新鮮味がなくてはならない。／新聞が社会国家と提携するの便宜及び能力を有する以上、その社会事業は、幾多社会事業家の間にも連絡と統制をもつところの妙致を發揮せねばならない。／新聞社が宣伝力を有するが故に、この力を利用して、教化的社会事業に瞩目することは元より当然で、かつ適切と云ふべきだ。／国家が社会政策を樹立して、これが実現に取りかゝる時、その政策が社会事業としての形質にまで次第に露渥せしめて、ゆくゆく在来の慣習を越えて、新規に移らしむることこそ詢に現代の願はしき姿である。これに対しても亦新聞社の社会事業は責任を負はしめられてゐる。識者の力を借り有力なる団体にむかつ

て如上の働きをなすことは最も重要な役割の一つである。／之を要するに、一般大衆へ、社会事業に関する注意関心を持たしめ、以て社会輿論の喚起を慮り、進んでこれを指導する一面には、ニュース、文書を以て社会事業促進に貢献し、文化的啓蒙、換言すれば社会教育のために報道機関の実力を挙げて不断の刺戟を社会民人に与へることに新聞社の社会事業の大使命が存在する。」³⁷⁾

ここでも述べられているように、彼は、新聞社が「社会国家と提携するの便宜及び能力を有する」点を積極的に生かし、「幾多社会事業家の間にも連絡と統制をもつところの妙致を發揮」するため、「識者の力を借り有力なる団体にむかつて……働きをなす」一方、「社会民人」に対する「文化的啓蒙、換言すれば社会教育」も推し進めるべきだととらえていた。そのような新聞社によるネットワークや人脈を駆使して、時局の要請へ敏感に反応しつつ社会全体の組織化を図ろうとする姿勢は、『保育』誌の誌面づくりにも反映されており、論稿や記事のテーマや執筆者を大きく変化させている。

誌面全体においては、「創刊後間もなく日中戦争が始まったことから、雑誌の内容も時局に関する記事が増えていく」一方、「本文の内容も、懐古的な方向に向かわざるを得なかったのか、『徳川時代の児童対策』等の記事が増えてい」るし、「執筆者にも変化が見られ、当初は研究者が多くを占めていたが、政府関係者や軍人による執筆や、実践家による国策に沿った実践報告や実践案などの記事が目立ってくる」という動きを見せた³⁸⁾。母親向け特設ページについて見れば、かつての「家庭保育 ちごちご草」欄では女学校・大学教員や幼稚園関係者、作家・詩人と多様な顔ぶれが並んでいたものの、「母のページ」枠では教育学者・心理学者・医師・作家ら有識者による寄稿が主となり、アジア・太平洋戦争の開戦前夜あたりから保姆ら保育関係者は姿を消し、軍人が前面に出たりもしていく。そのような変化は、他誌『幼児の教育』の月刊「幼児の母」欄が幼稚園関連の実践者や研究者の執筆による誌面づくりを行い続けたところとの大きな違いでもあろう³⁹⁾。

第2に、附録の活用や催事との連動、広告との一

体化など、いわゆる「メディア・イベント」としての性格を持った誌面づくりがなされていた点についてである。これも、「全日本保育聯盟」が大阪毎日新聞社会事業団を母体とした組織であったことに由来していよう。「宣伝をし、報道を通じて啓蒙していくことと、社会事業の実践とが不可分につながっていく新聞社会事業の特質」を駆使した母親教育が、『保育』誌上では行われたのである⁴⁰⁾。

吉見俊哉によれば、狭義の「メディア・イベント」とは、新聞社や放送局など、企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されていくイベントのことであり、「わが国のマス・メディアは、その発展のかなり早い段階からイベント開催に関与し、独特のイベント文化を形成してきた」のだという⁴¹⁾。津金澤聰廣は、そうしたマス・メディアの中でも、「とりわけ、いちちやく資本主義的な経営方式を取り入れ、関西において互いに激烈な競争を展開してきた『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』は、日露戦争を境にさらにいっそう……『報道主義』『販売重点主義』態勢を強化し、発行部数拡大を実現し」ており、「しかもそれは、たんに報道面における電報、号外、付録合戦などにとどまらず、いきおいそれは、宣伝・広告、販売面における熾烈な『事業活動』の開発と推進というかたちでも積極的に競われることとなった」と指摘し、大阪毎日新聞社のイベント事業の1つであった「大阪毎日新聞慈善団」の先駆性を評価している⁴²⁾。同慈善団の後身である大阪毎日新聞社会事業団内に結成された「全日本保育聯盟」も、そのようなイベント事業には熱心であり、機関誌『保育』を媒体として、附録や催事などを積極的に利用した宣伝・啓蒙・啓発活動へと取り組んだ。

母親向けの誌面づくりに関しては、当初は別冊子であった「家庭保育 ちごちご草」を第4号から綴じ込み附録として合冊し、さらに家庭向け「美麗色刷手技」も折り込み附録とする形で、ページの特設化を図ったことにはじまる。そこに掲載された論稿や記事など自体は他誌と比べて目新しさがなければ、本誌に二重で附録を添えるという宣伝・販売戦略は、まさにマス・メディアが仕掛ける事業としての性格を物語っていた。また、「家庭保育 ちごちご草」欄は第8号を以て特設ページから外され、保育関係者向けの論稿や記事などと渾然一体化した誌

面になり、第12号から表紙のデザインも一新され、「お母さんと先生の雑誌」を謳うように変わる。そして、その広報・啓蒙戦略は、誌面上のみならず、保育・育児展覧会などの開催という形でも展開されることになる。こうした催事を組み込んだ事業展開も、新聞社によるメディア・イベントらしさを示すものであろう。

さらに、約3年後、『保育』誌は第42号において「母のページ」という括りを目次上で設け、改めて母親向けの誌面づくりへと乗り出す。これは、「家庭保育 ちごちご草」欄のように雑誌内で特定の部分を占めるものではないものの、逆に、あちこちに論稿や記事が点在して掲載されていることで、もともとは別枠であるはずの企業広告との一体感も生み出しており、理想的な育児文化のイメージを読者に浸透させる装置としての機能も発揮していた。一方、論稿や記事の内容について、当初は有識者による論稿や保健・栄養関連の読み物、作家・保姆・母親の随筆、「親子理科」関係の連載、短歌・俳句・童話などの文芸を並べたものであったのが、アジア・太平洋戦争の開戦から「戦時家庭教育指導要項」の発表へと至る時期を境に大きく変容する。保健・栄養関連の記事・コラムや文芸などは次第に後退し、母親を国家統制の秩序へ取り込もうとする国策にいち早く応じて、「国体」や「日本精神」を強調し、健全なる子女の育成及び母が担うべき使命の自覚を促す論稿中心の内容へと、「母のページ」内を一新させたのである。そのような変わり身の早さは、他誌『幼児の教育』の月刊「幼児の母」欄に見られた変化を上回るものであり、単なる保育団体がなし得るレベルを超えていたとも言える⁴³⁾。「大正期から本格化するわが国のマス・メディア事業は、大ざっぱに言って、近代的な消費生活のイメージを大衆的に浸透させる広告装置としてのメディア・イベントと、軍事的に拡張する国家の戦略に大衆意識を動員していくプロパガンダ装置としてのメディア・イベントの、両方の側面を一貫して発展させてきた」とされる⁴⁴⁾。大阪毎日新聞社の社会事業から生まれた『保育』誌における母親向け特設ページとは、まさに、そのような「広告装置」及び「プロパガンダ装置」としてのメディア・イベントを基盤に置き、それらによる宣伝・啓蒙・啓発活動を展開した舞台の1つ

であったと見なされよう。

第3は、母親の科学的教養の向上をめざし、「家庭保育 ちごちご草」欄の頃から西村眞琴らによる「親子理科」関係の読み物を掲載する一方、「全日本保育聯盟」母性保護の会主催で「母子郊外趣味の会」を開き、その実施報告も「母のページ」枠で連載した点についてである。それらの基盤になっていたのは、生物学者・西村の「自然科学および自然哲学に裏づけられた保育思想」であり、「親子ともども自然に親しみながら自然を観察し、同時に科学的に思考する態度を養成す」べきだという家庭教育思想であった⁴⁵⁾。彼は、その取り組みの意義について、次のように述べている。

「私はこれからの女性——それは現に母として、又は子女を導く役割の負荷者として、大に科学的態度を持してもらひたい。これは家庭人としての立場でもさることながら、母としての責任を全うする上に極めて基礎的な要求である。／『女性の手は物質を堅牢にする』^(ママ)こゝまで女性が台所をはじめ家庭内の調度に対して物理物性をわきまへて貰ひたい。／『母の手は子供の成長素である』^(ママ)こゝまで母たるものは子供の動作のみでなく子供の心理に触れて、その接触が直ちに子供の欲するところに行きとゞくまでに聴くありたい^(ママ)、これが科学する女性の価値であり、科学する母の成果なのだ。一国の女性と母との科学する態度が子供を通じて物をいふのだから保育国策の根源には女性に要求する科学的態度の涵養が重大意義を有する次第である。」⁴⁶⁾

しかし、こうした西村眞琴の主張は、家庭教育で重視すべき項目の1つとして、「子女ニ対シ科学的教養訓練ヲ行フコト」を掲げた教育審議会答申「家庭教育ニ関スル要綱」(1941年6月)と時を同じくするものであった⁴⁷⁾。そして、それは、約1年後、「戦時家庭教育指導要項」の第3項「母親ノ教養訓練」に示された項目の1つ、「科学的教養ノ向上」へ必然的に応えるものともなる。すなわち、「国民ノ科学的教養ハ幼少ノ間ニ啓培スルコトヲ要シ而モ子女ノ科学愛好ノ精神ハ母ノ教養ニ負フトコロ極メテ大

ニシテ家生活各般ノ問題ヲ処理スルニ科学ノ謬ラザル活用ヲ図ルコトハ国策ヘノ協力ニトリテ極メテ緊要ナリ仍テ特ニ母ノ科学的教養ノ向上ヲ図リ子女ノ教養ニ寄与セシムルト共ニ国策ヘノ協力ヲ徹底セシム」ための戦時家庭教育施策へと同調していくのである⁴⁸⁾。そのことは、同「要項」の公式解説書において、「女子は……、母として子弟の科学的萌芽を助長する地位にある」以上⁴⁹⁾、「母に科学的教養がなければ、その子の科学的興味を、伸ばして行くことは出来ない」と述べた戸田貞三の主張に一致している点でも明らかであろう⁵⁰⁾。

注

- 1) 文部省社会教育局編『社会教育の施設概観』文部省社会教育局、1940年8月、pp.17-18。
- 2) 倉橋惣三「幼稚園の家庭教育補導」(『幼児の教育』日本幼稚園協会、第40巻第2号、1940年2月、p.1)。
- 3) 拙稿「1940年代前半の保育雑誌における『母親教育』記事——『幼児の教育』誌の月刊『幼児の母』欄を中心に」(『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』第17号、2016年)。
- 4) 倉橋惣三「月刊『幼児の母』の計画に就て——御賛同と御利用を乞ふ」(『幼児の教育』第40巻第1号、1940年1月、pp.42-43)。
- 5) 拙稿「総力戦体制下の雑誌『保育』における『母親教育』記事——創刊当初の『家庭保育 ちごちご草』欄を中心に」(『中部大学現代教育学部紀要』第12号、2020年)。なお、本稿はこの拙稿に続くものであり、『保育』誌などを扱った先行研究については、同稿を参照のこと。
- 6) 渡邊多恵子編『育児報国展集抄——母よ強かれ!』全日本保育聯盟、1939年。
- 7) 松本園子「〔解題〕『保育』(昭12～19)——全日本保育連盟」(社会事業史文献調査会編『社会事業雑誌目次総覧(別巻)』日本図書センター、1988年、p.386)。
- 8) N記「編輯の窓」(『保育』全日本保育聯盟、第9号、1937年12月、p.96)。
- 9) 〔無署名〕「編輯室」(『保育』第42号、1940年10月、p.92(〔……〕は引用者、以下同様))。
- 10) 〔無署名〕「巻頭言」(『保育』第37号、1940年5月、p.1)。
- 11) 〔無署名〕「巻頭言」(『保育』第39号、1940年7月、p.1)。なお、同号の掲載記事「『保育総動員展覧会』参観記」でも国防婦人会会員による手記が用いられており、そのことから、両者の協調が窺い知れる。
- 12) 林銑十郎「“保育”の創刊を喜ぶ」(『保育』第1号、

- 1937年4月、p.18)、河原田稼吉「“保育”の発刊を祝す」(同前、p.19)。
- 13) [無署名]「あとがき」(『保育』第1号、p.63)。
- 14) 大日本国防婦人会については、藤井忠俊『国防婦人会——日の丸とカッポウ着』(岩波新書、1985年)、糴谷美規子『戦争を生きた女たち 証言・国防婦人会——大阪府立婦人会館情報ボランティアグループの活動から』(ミネルヴァ書房、1985年)、創価学会婦人平和委員会編『かっぽう着の銃後——平和への願いをこめて17/国防婦人会(大阪)編』(第三文明社、1987年)などが詳しい。
- 15) 大井生「編輯室」(『保育』第40号、1940年8月、p.92)、長野隆義「編輯室/御挨拶——図らずも保育編輯室に入りて」(『保育』保育発行所、第41号、1940年9月、p.90)。
- 16) 全日本保育聯盟母性保護の会「母子郊外趣味の会(第一回)」(『保育』第42号、pp.68-70)。
- 17) [無署名]「編輯室」(『保育』第56号、1941年12月、p.88)。
- 18) 森田ちゑ・小坂薫・森野富子・高木ちか子「子は国の宝——偉人の母を語る」(『保育』第57号、1942年1月)、春海玉江「健気な母——思ひ出」(同前)、三好忠幸「健気な母を訪ねて」(同前、第58号、1942年2月)。
- 19) M記「編輯室」(『保育』第58号、p.88)。
- 20) M生「編輯室」(『保育』第59号、1942年3月、p.88)。
- 21) 「戦時家庭教育指導二関スル件」(近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料(第7巻)』大日本雄弁会講談社、1964年)。
- 22) 同上。文部省社会教育局編『家庭教育指導叢書 第1輯 戦時家庭教育指導要項』文部省社会教育局、1942年3月。戸田貞三『家の道——文部省戦時家庭教育指導要項解説』中文館、1942年。
- 23) 奥村典子『動員される母親たち——戦時下における家庭教育振興政策』六花出版、2014年、p.112。
- 24) 長田新「大東亜建設と保育」(『保育』第60号、1942年4月)、大倉邦彦「大東亜建設と保育随想」(同前)、西村眞琴「大東亜精神と幼児教育」(同前)。
- 25) M・T記「編輯室」(『保育』第60号、p.84)。
- 26) 平出英夫「母よ強かれ」(『保育』第61号、1942年5月、p.7)。
- 27) 市川寛・平林治徳・山崎かね・桐淵とよ・望月クニ・丸本ちゑ・藤田ミツ・二宮吉野・西村眞琴・長野隆義・河村猶次郎「新母性講座談話会」(『保育』第61号、p.8)。
- 28) M、T記「編輯室」(『保育』第61号、p.82)。
- 29) [無署名]「新母性訓——文部省の指導要項」(『保育』第60号、pp.36-37)。
- 30) 増田記「あとがき」(『保育』第68号、1942年12月、p.81)。
- 31) 増田記「あとがき」(『保育』第70号、1943年2月、p.70)。
- 32) 増田記「編輯後記」(『保育』第71号、1943年3月、p.68)。
- 33) 増田記「編輯後記」(『保育』第74号、1943年6月、p.54)。
- 34) 拙稿「アジア・太平洋戦争下の雑誌『国民保育』——その書誌と誌面の内容的変遷」(『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』第18号、2017年)。
- 35) 水野浩志「西村眞琴——全人的能力を保育に投入した驚嘆すべき人物」(岡田正章・宍戸健夫・水野浩志編『保育に生きた人々』風媒社、1971年、p.333)。
- 36) 湯川嘉津美「解説」(『復刻版「保育」戦後編 I / 1946-1955(第15巻)』日本図書センター、2015年)。
- 37) 西村眞琴「新聞社の社会事業」(『社会事業』財団法人中央社会事業協会社会事業研究所、第20巻第9号、1936年12月、pp.7-8)。
- 38) 土井洋一・板原和子「植物学者・西村眞琴の思想と実践(その1)——戦時下の保育・社会事業活動を中心に」(『社会問題研究』大阪府立大学、第46巻第1号、1996年12月、p.34)。
- 39) 拙稿「1940年代前半の保育雑誌における『母親教育』記事」(前掲)。
- 40) 佐藤健二「新聞社の社会文化事業」(川添登・山岡義典編『日本の企業家と社会文化事業』東洋経済新報社、1987年、p.176)。
- 41) 吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」(津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、p.4)。
- 42) 津金澤聰廣「大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化——本山彦一の時代を中心に」(津金澤編、前掲書、p.217)。
- 43) 拙稿「1940年代前半の保育雑誌における『母親教育』記事」(前掲)。
- 44) 吉見「メディア・イベント概念の諸相」(前掲、p.6)。
- 45) 水野「西村眞琴」(前掲、p.324)。なお、西村眞琴の著書で「親子理科」を論じたものに、同『親と子の自然科学』(毎日新聞社、1943年)や同『親子の自然研究』(私家版、1955年)がある。
- 46) 西村眞琴「保育誌四周年に際し、生活を真実にする」(『保育』第49号、1941年5月、p.8)。
- 47) 「教育審議会第十三回総会会議録」(近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料(第15巻)』大日本雄弁会講談社、1964年)。
- 48) 「戦時家庭教育指導二関スル件」(前掲)。
- 49) 戸田『家の道』(前掲、p.123)。
- 50) 同上、p.120。

※本稿は、「平成30年度科学研究費助成事業（学術
研究助成基金助成金（基盤研究（C））」（タイトル：
「『総力戦体制』下の保育雑誌に見る女性専門職の

〈技術的動員〉——『保育』誌を中心に」、課題番
号：18K02501）による研究成果の一部である。

受付日 2020年9月30日

受理日 2020年10月28日

Abstract

This study examines education for mothers in a series of articles titled ‘Haha-no Page’ published in the monthly magazine “Hoiku” in the early 1940s. An overview of the articles summarizes them under the following three points. First, by actively utilizing various connections—not only in childcare, education, and social work, but also in politics, companies, and the military—the content of mother education at the time was reflected in the articles. Second, the reading material for mothers in the magazine was edited with the intention of producing a so-called “media event,” such as by linking articles to events and integrating them with advertisements. Third, Zen-Nihon Hoiku Renmei (the All-Japan Federation of Early Childhood Care and Education) hosted nature observation parties in the suburbs, and the articles written by Makoto Nishimura prompted mothers to deepen their understanding of natural science and motivated them to teach science at home.

Keywords: Monthly Magazine “Hoiku,” Zen-Nihon Hoiku Renmei, Makoto Nishimura